

令和2年度 学校評価結果報告書(特別支援学校用)

(1) 学校教育目標	児童生徒一人一人の障害の状態や特性に応じた指導を通して、それぞれの可能性を最大限に伸ばし、自立と社会参加のための生きる力を育む。	学校整理番号	特7
		学校名	青森県立青森第二養護学校
		対象障害種別	視覚・聴覚・ <u>知的</u> ・肢体・病弱
(2) 現状と課題	知的障害と自閉性障害を併せ有する児童生徒が全在籍数の5割を超えており、集団適応や対人関係に課題がある者が多い。また、精神性疾患を伴ったり知的障害が軽度だが行動調整に課題を抱えたりして個別の対応が必要な高等部生徒が増加傾向にあり、学校経営に当たっては、福祉、医療、労働等関係諸機関との連携強化を図るとともに、地域の協力、保護者の参画による学校力の向上に努めている。	自己評価実施日	令和2年11月30日(月)
		学校関係者評価実施日	令和3年2月1日(月)
(3) 重点目標	1 教育活動の充実	(9) -イ 学校関係者評価委員会の構成	
	2 教職員の組織力の向上		
	3 関係機関等との連携強化		
(4) 結果の公表	・保護者全員に対して、学校評価結果及び説明資料を配付した。 ・ホームページに登載している評価結果を更新する予定である。	学校評議員6名 保護者1名、地域住民1名、児童養護施設職員1名、 実習・進路先施設職員1名、青森市保健所職員1名、 元教頭1名	

自 己 評 価				学校関係者評価		
番号	(5) 評価項目	(6) 具体的方策	(7) 具体的方策による目標の達成状況	(8) 目標の達	(9) -ア 学校関係者からの意見・要望・評価等	(10) 次年度への課題と改善策
1	教育活動の充実	①児童生徒一人一人の「主体的・対話的で深い学び」の視点を踏まえた授業づくり ②児童生徒の自立と社会参加を意識した指導内容の整理と指導方法の工夫 ③精神疾患や自閉症等、障害特性多様化への教育的対応の工夫 ④自立活動の指導の充実 ⑤特別の教科道徳の充実 ⑥特色ある教育活動の充実 ⑦生徒会活動の活性化の推進	・コロナ禍の中、様々な教育活動を中止するのではなく、どのようにしたら実施できるかという視点で検討計画し、様々な教育活動を充実することができた。 ・「知的障害特別支援学校における内面の育ちを促す道徳科の授業」を研究テーマにした全校研究では、道徳の教材づくりや専門性向上が図られた。 ・長年取り組まれてきた活動を、新たな視点で見直したり、実態に合わせて工夫改善したりすることにより、児童生徒の積極的な社会参加の意識が高まった。	A	・青二養の児童生徒が散歩をしたりごみ拾いの活動をしたりして頑張っている姿を度々目にしていて、これからも、児童生徒が安全に地域の中で活動できるよう協力していきたいと考えている。 ・居住地交流に積極的に取り組んでいることに感心している。 ・「施設設備、教材・教具」の評価が他の項目より低いといっても「80%以上」の高評価であり、昨年より数値も上がってきているので、引き続きの取組を期待したい。 ・在学中に、他の人に自分から相談する力を少しでも身に付けられるように指導をお願いしたい。相談できる相手がいるということの感覚を身に付けさせて欲しい。	・全校研究の成果と課題を新たな取組につなげ、道徳教育を推進する。 ・コロナ禍の中、各行事の在り方を含む教育課程の整備を更に進める。
2	教職員の組織力の向上	①学部内、分掌内と学部や分掌間の連携強化 ②学部主任等連絡会の連絡調整機能による学校運営の推進力向上 ③複数での業務推進による組織としての力量向上 ④いじめや体罰のない明るい学校を目指して、全教職員の共通理解と協力体制による指導の徹底	・学習活動全般で、児童生徒の障害の状態や実態を踏まえ、指導のねらいや実施形態などが見直された。 ・コーディネータ会議等により、児童生徒への指導が即時的かつ継続的に実施、改善され、学部間で共有された。 ・教職員の業務改善への意識が高まっているが、組織的な取組の更なる工夫と継続が求められる。	A	・コロナ禍で保護者も気軽に学校に入れない状況だが、ホームページで学校の取組の様子を知ることができている。 ・研究については、保護者には分かりづらい評価項目であり、学校の取組をどう伝えていくかが課題である。職員の評価が高いのは、各自がやる気をもって研究や研修に取り組んでいることの表れだと思われる。	・業務改善の具体的な取組を進めるとともに個々の意識啓発を継続する。 ・分掌組織が連携した効率的運用や専門性向上をより一層進める。
3	関係機関等との連携の強化	①保護者や施設等との連携による指導の充実 ②地域の資源を活用した教育活動の展開 ③学校としての情報の整理・蓄積と地域への発信力のさらなる強化	・入所施設や放課後利用施設との定期及び臨時の情報交換により、対象児童生徒の心身の安定につながる共通した指導や支援が行われた。 ・コロナ禍の中でもできる範囲で地域住民や近隣の民間事業所の協力による取組が定着し、児童生徒の実態に応じた工夫や改善が図られた。 ・学校だより等が定期的に発行されており、学校ホームページも一新され、情報伝達をより多くできるようになった。	A	・学年が進むにつれ、放課後等デイサービスと学校の連携が薄れてきているような印象を受けている。デイサービスと学校が子供の情報を共有して指導できるよう、連携に努めてほしいと願っている。 ・実習の回数が少ない中、新規の企業へ3名就職できている。このコロナ禍でも、新たな実習先を開拓するには先生方の大変な苦勞があったことと思っている。一般就労者に対しても、仕事を長く続けていけるようにアフターフォローに努めてほしい。	・保護者の安心感につながる情報提供を丁寧に行う。 ・地域との信頼関係をさらに強くする情報共有を、様々な方法で行う。

(11) 総括	「教職員による自己評価」20項目の平均評価点は3.2(前年同)であり、「保護者アンケート」18項目の全体平均評価点は3.6(前年比0.1増)であることから、今年度の教育活動については「概ね適切に実施されている」と捉えることができると考えられ、学校関係者評価においても、学校経営が適切に実施されているという評価をいただいた。 次年度は、引き続き保護者の安心感を得られるような取組を進めるとともに、ホームページの活用を通じた児童生徒の学習活動のみならず教職員の活動についても積極的に情報発信を継続する必要がある。 また、withコロナを踏まえた、教育課程の検討を行うとともに、分掌組織の効率的な運用を始めとする業務改善方策を具体的に展開するなど、円滑な学校運営と教育活動の充実に向け、組織的・継続的な改善に努めたい。
---------	--